

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：32527

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24653255

研究課題名(和文) 教員養成においてロール・プレイングの発見的側面を絵本に表現することの意義

研究課題名(英文) The confirmation of ego-discovery in picture book making like role-playing in the process of the teacher training

研究代表者

植草 一世 (UEKUSA, Kazuyo)

植草学園大学・発達教育学部・教授

研究者番号：80320729

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、保育者養成で、ロール・プレイングと同様に絵本作りの楽しさやメッセージ性を学生に気づかせ内面性の成長を助けることを主眼とした。結果を見ると、絵本作りによって自分の経験の振り返りと統合が促進された。子どもの絵本作りを手伝うことで、学生は子どもの内面に触れることができ、子どもの理解が深まり、関わり方に自信を持つことができた。子どもにも、内面性の成長に役立つことが分かった。さらに幼児の絵本に表現された内容や素材の分析を行い、3つの個性を把握した。幼児の絵本作りを手伝う時に、その個性に合わせた援助が幼児の成長にとって大切であり、学生の保育者としての資質もさらに高まるものと考えた。

研究成果の概要(英文)：The goal of this research is to confirm the utility of picture book making for both students and children like role-playing. When students made their picture books, the integration of their past experiences was enhanced. When students helped children make picture books, they could feel the core minds of children and deepen their understanding of children. As a result, they could have confidence in interaction with children. Children also grew their core minds. We found three kinds of styles which are expressed in their picture books. The student's quality as teachers is thought to be enhanced by the interaction in accord with these styles, when they help children make picture books.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

 キーワード：保育者養成 教員養成 絵本作り 手作り絵本 子どもの絵本作り支援 絵本作品の内容分析 手作り  
 絵本の素材 個性に合わせた援助

### 1. 研究開始当初の背景

教員(保育者)養成の一環として、保育現場の研修に学生が参加する教育活動を行ってきた。しかし学生の中には、先輩から後輩への保育方法の伝授と受け取り、自分の力不足を自覚し自信を失うことがあった。そこで、学生自身が、感じ、考え、学ぶことが大切と考え、ロール・プレイング(以下R・Pと記す)体験をその課程に取り入れてきた。そのことによって学生は、子どもや保育者の立場に立って保育現場をイメージし、良い学びを得た。R・Pでは演者、観客など、いろいろな役割を経験することによって、相手の心の動きに気づくことができた。R・Pによって正解を追求するのではないということ、一人ひとりが「感じる」ことに意味があることが分かった。R・Pは、多様な立場の者が同じ土俵で演じ語り合える。その結果学生は、子どもによりそい、心情や動作を細やかにとらえることが意外と難しく重要であることを学ぶことができた。R・P研修の体験では、机上の学習を超えた参加者の気づき、自己理解、他者理解の深化が期待され、体験的職能研修として効果的であるという結論を得られ<sup>(1)</sup>。そのためにR・Pを教員(保育者)養成に取り入れることが望ましいと分かった<sup>(2)(3)</sup>。しかし、R・Pがうまく機能しないと、演じることにストレスを感じ、意欲を失う場合もある。心が解放されるように楽しく行ってこそ意味があり、そのためには、ウォーミングアップを行う等の力量を研修で高める必要がある。この結果から、R・Pより簡単に、内面性を高める絵本作りを試みることにした<sup>(4)</sup>。

### 2. 研究の目的

絵本は、人格形成や成長に大きな影響を与えるといわれる。今までは読み聞かせの観点からそう言われることが多かった。しかし本研究者は、絵本を作り自分の思いを作品に表現することにも人格形成上、大きな可能性があると考えた。本研究では、子どもの絵本作りを支援することによって、教師(保育者)を目指す学生が、自分を内省し、内面の育ちを重視し人を大切にできる力のある教師(保育者)へと成長する可能性を探ることを目的とする。

### 3. 研究の方法

研究調査1~7を行った。

(1) 調査1: 学生と行った絵本作りの過程に現れた子どもの気持ちの把握。

期間: 平成24年4月~平成25年11月

対象: 幼稚園年長児(5~6歳)33名

実施日: 平成24年7月5日

場所: U大学保育技術演習室

調査の方法: 質問紙によるデータ収集(絵本作りの中で、子どもとペアになった学生が子どもに聞き取りを行い調査用紙に記入。

~ は4択法、 は自由筆記。その場で

学生から回収。 は、担任教諭が普段の子どもの様子を記入した。回収率は100%)。

質問項目: 学生と一緒に過ごすことは楽しかったかどうか。 お話作りが楽しめたかどうか。 表紙はよくできたかどうか。

自分らしい絵が描けたかどうか。 完成したら身近な人に読んで(見せて)あげたいかどうか。 また作りたいかどうか。

活動に興味を持って取り組めたかどうか。 学生と一緒に相談してできたかどうか。 絵本以外のことも大学生と活動できたかどうか(出会いの会、学内散策、お弁当等)。 学生から見た絵本作りの様子。

担任教諭から見た普段の様子。

データ処理: マークシートの回答は普通紙マークシートソフト「正一郎2」で集計した。カテゴリ毎に集め分類して同研究者全員で整理した。

(2) 調査2: 子どもが親子で絵本のお話作りをした際の子どもの様子と思いを把握する。親の絵本に対する意識を把握する。

対象: 調査1の幼稚園児とその保護者

実施日: 平成24年6月26日

場所: 幼稚園および各家庭

調査の方法: 質問紙によるデータ収集(絵本作り後、保護者に配布した質問紙によるデータ収集。実施日から1週間以内の期限を設け幼稚園が回収した。回収率は100%)。

質問項目: 絵本作りの子どもの様子感想。回答は、自由筆記

(3) 調査3: 絵本作品の内容分析

対象: 幼稚園児の完成絵本 33冊

期間: 平成24年8月1日~9月30日

調査の方法: 本研究者によるチェックシートによるデータ収集と整理。

チェック項目: 表紙の素材(地の部分)

表紙の素材(図や飾りの部分) 子どもの手描きの画材 活用の仕方

(4) 調査4: 学生の子どもの関係作りの意識調査

対象: 授業受講者 大学生43人

期間: 平成24年7月5日~26日

(学生のお話作りは12回、子どもとの絵本作りは3回行う)

場所: U大学保育技術演習室

方法: 質問紙によるデータ収集

質問項目: 絵本作りでの子どもとの関わり。 保育士になるにあたっての意識。

アンケート調査方法: 学生にアンケートを絵本開始日(7月5日)と終了日(7月26日)に行う。両日とも子どもとの講座修了後に書きその場で回収。

データ処理: 自由筆記による各回答を集めて整理した。

(5) 調査5: 保育者になるにあたっての子ども理解の意識

対象：「絵本・児童画演習」受講の大学3,4年生23名(男子6名,女子17名)  
期間：平成24年7月5日~26日(子どもとの絵本作りはこの期間内に全3回行い,初回と最終回にアンケート調査を実施した。学生自身はこれ以前に12回の授業内で絵本作りを行っている。)

場所：U大学保育技術演習室

調査方法：マークシート方式の質問紙によるデータ収集。全8問の質問項目に対しどう感じるかを、「難しい」「少し難しい」「少し易しい」「易しい」の中から選択させた。

質問項目：子どもと親密な関係を築く。

子どもとの信頼関係を築く。子どもの心を理解する。子どもの気持ちを理解する。子どもをしっかり指導する。子どもの立場に立ち,子どもがやりたいことを一緒にできる。子どもから意欲を引き出す。子どもと話ができて,子どもが大切に思っていることを聞ける。

データ処理：回答は普通紙マークシートソフト「正一郎2」で集計し,各回答を百分率で示した。なお,本研究では便宜上,「難しい」と「少し難しい」を「難しい群」,「少し易しい」と「易しい」を「易しい群」とした。

#### (6) 調査6：絵本作りにおける幼児の取り組み方

対象児：千葉市にあるA幼稚園の年長児35人(男児22名,女児13名)

研究の経過：平成25年,7月4日 絵本の表紙作り。保育士をめざす学生と一緒に表紙作りを行う。夏休み,家庭での絵本作り。1学期の最終日の7月19日に,絵本作りの説明を行い,表紙ができた絵本キットを家庭に持って帰ってもらった。絵本作りは,夏休みの間に行なわれた。内容や作り方については,物語など自由に考えてもらうことにした。絵本は,二学期(9月)が始まってから提出してもらった。

絵本の素材：絵本作りの素材として,手作り絵本館の絵本キット(有限会社ログハウス,B5横サイズ,14ページ)を使用した。本物の絵本らしい素材である。

母親へのアンケートの内容：答えを選択する質問と記述式で答える質問を行った。答えを選択する質問は,「1.そう思う」「2.ややそう思う」「4.あまりそう思わない」「5.そう思わない」の4件から答えを選ぶものである。

質問項目：マークシート(以下,Mとする。)

M1:絵本の物語が自分の経験に基づいている(以後,「自分の経験」と略す)。M2:自分の経験から実際以上に頑張り活躍したように書かれている(以後,「活躍の仕方」と略す)。M3:自分の経験から,学んだことが書かれている(例えば,生きものを大切にしなければいけないなど,以後,「学んだこと」と略す)。M4:自分の経験から,

こうなればよかったという受け身的な希望が書かれている(例えば,お母さんに助けてほしかったなど,以後,「受動的希望」と略す)。M5:自分の経験や現状をありのまま,描いている(家族や好きな物紹介,以後,「リアリズム」と略す)。M6:自分が経験した感情を表現している(気持ちを表現してスッキリする,以後,「気持ち表現」と略す)。M7:知っていること,知りたいことをまとめている(以後,「知識のまとめ」と略す)。M8:全くの空想物語である(以後,「空想」と略す)。

記述式質問：絵本作りの際のお子さんの様子をお書きください。絵本作りを通じてお子さんが得たことやおうちの方が再認識した点がありましたらお書きください。

調査方法：選択式質問では幼児が自分の経験を絵本にどのように表現していたかを問う質問が中心であり,記述式質問では絵本を作るにあたっての本人の取り組み方や絵本を作ったことで本人が得られたことや母親が新たに発見した幼児の姿を尋ねた。

#### (7) 調査7：幼児及び児童との絵本作り

対象：「絵本・児童画演習」受講の大学3,4年生29名(男子2名,女子27名)

調査日：平成25年7月3日(幼児の絵本作り),7月20日(小学生の絵本作り)

場所：U大学保育技術演習室

調査方法：マークシート及び自由記述方式の質問紙によるデータ収集。マークシートは,質問項目に対し「できなかった」「あまりできなかった」「できた」「よくできた」のうち一つを選択させた。

質問項目：M1:子どもと親密な関係を築く。M2:子どもとの信頼関係を築く。M3:子どもの興味を理解する。M4:子どもの気持ちを受け入れる。M5:子どもの立場に立ち,子どもがやりたいことを一緒にする。M6:子どもの持っている物語のイメージを豊かにする。M7:子どもから,表現したくなるような意欲を引き出す。M8:子どもと話ができて,子どもの言いたいことがわかる。

自由記述(以下,Jとする)J1:どのような内容の絵本を作りたいか,子どもと話ができましたか。内容がわかれば書いてください。J2(幼児のみ):どんなお話にするかを聞いたときにわかった,子どもの興味や考え方について書いてください。J3(児童のみ):どんなお話にするかを聞いたときに気づいた,小学生らしさや幼児との違いを書いてください。

データ処理：マークシートの回答は普通紙マークシートソフト「正一郎2」で集計した

## 4. 研究成果

(1) 調査1,2:子どもの気持ち理解からの

絵本を作る意味の考察〔5．主な発表論文等・論文(4)に公表〕

今回の研究でも子どもたちは、絵本作りに強い興味を示し活動を楽しめた。また、子どもだけでなく親も真剣に取り組む様子を示していた。しかし支援者である親や学生には、事前に関わり方について指摘しなかったが、結果として学生は支援的、応答的であり、親は干渉的、先導的な傾向があった。支援者の関わりについて今後の課題である。

今までの物語研究では、幼児がどの程度物語を理解し作れるかという認知的な側面に注目したものであった。しかし物語作りには情緒的側面が備わっていることがわかる。Anne Davis Basting が創始した「タイムスリップス」<sup>(5)</sup> は、認知症の高齢者用のプログラムで参加者が自由に思いつきを語りながら物語を作っていく活動である。精神的な働きが衰えた高齢者であっても、自由に物語を作ること生き生きとした表情を示すようになり人とのコミュニケーションを楽しむようになる。物語作りには人の心を活性化する力があると考えられ、経験を統合する働きがある。

絵本作では、いくつもの場面が関連し合いながらまとまりを作る。これは自分がやってきたこと、考えてきたことなどの経験の意味の確認ともいえる。今まで生きてきたことへのまとまりのある意味づけや意味への気づきを促すことにもつながる。人間は生きる意味を求め存在<sup>(6)</sup>であり、そのために子どもも親も絵本を作ることに価値を感じ、興味を膨らませたとと思われる。絵本作りによって行われる物語作りは、自分の生きる意味を発見する手立てとなるものと考えられる。制作者の人間性や心が明確に現れる場なのである。

(2) 調査3: 絵本の素材からの考察〔5．主な論文, 雑誌論文(2)に公表〕

田島<sup>(7)</sup>によると、子どもは、物語を作る上で、お話作りにおける素材についての知識が少ない、という。そこで植草<sup>(雑誌論文(2))</sup>が取り組んできた絵本作りでは、服で絵本の表紙を包み、お話の内容にそった写真をコピーしてコラージュしていくことを、導入的な手法として行った。いろいろな写真があることで、簡単に絵本作りに取りかかれるからである。大人はその子に合った素材を提供することができ、子どももお話作りが展開しやすくなる。親でなくては準備できない子どもの服や写真、子どものお絵かき作品のコピーなどが、子どもの心を刺激するのである。

(3) 調査4: 取り組み方からの支援の考察〔5．主な論文(3)に公表〕

絵本作りは幼児にとっては困難であるという予想をしたが、幼児によって困難さを感じる程度は違っていた。予想通りに困難を感じる幼児がいたが、一人で一気に楽しく仕上げた幼児もいた。ただ物語の筋が思いつか

くて苦しんだ幼児や文字を書くのが難しいという幼児も、やり方が分かってくると、楽しく取り組めるようになった。ある程度困難であったためと思われるが、絵本を仕上げた達成感を感じる幼児が多かった。このような達成感、自信にもつながり、幼児の心の成長にプラスになるとと思われる。

また、幼児がつくる絵本は、その内容から見て、図鑑系、物語系、思い出系の3つの領域に分けられた。

図鑑系の絵本作り

空想を加えず自分の経験をありのまま描くことが多く、知識をまとめる形のものであった。アンケート結果を見ると、書くことが苦手であったが書けるようになったなど、書く力がついたという指摘、自分でまとめる力、自分で考える力、こうしたいという主体性が得られたという指摘があった。また調べること知識が得られたという指摘もあった、構成力や表現力、調査力、知識が身に着いたと母親は評価している。母親が子どもについて再認識したことで見ると、「意外とできる」という驚きが多かった。文字が書けた、苦手なのに書けた、自分なりに調べた、意欲・集中力があつたが驚きの内容である。

以上のことから、図鑑系の絵本作りでは、興味があつて自分で進めていくので、幼児が興味を持つことに対して、大人も興味を示すことが大切であろう。援助するにしても、調べ方や説明の仕方などの助言をしてあげるとよいと思われる。今回も、書き方を教えたり、関係する図鑑を示したりする援助が行なわれた。

物語系の絵本作り

物語系では、自分の経験に基づいていることが多く、自分が実際以上に頑張ったように表現している傾向が見られた。経験に基づきながら空想し、気持ちを表現していると言える。作製時の様子は、苦勞している幼児と一気に書き上げる幼児に分かれた。物語を考えることが難しい子と物語を考えるのが得意で自分で仕上げる幼児がいたということである。田島(1998)が指摘するように、「創造的課題」は慣れないうちは生み出すのに苦勞するのであろう<sup>(7)</sup>。子どもが得たものを見てみると、普段できないことができたという達成感が見られる。やり遂げたという自信も見られた。物語を創造する難しさがある反面、「自分のもの」ができたという喜びもあつたと思われる。親が再認識した点について見てみると、日頃から、文字の練習や絵書き、絵本読みが不足していたという反省があつた。逆に、その創造力や表現力、子どもの好みを再認識させられたという記述が見られた。隠された才能に驚くという感じであつた。

創造性を必要とする物語作りは、日頃やっていないだけに、得意不得意が分かれたと思われる。物語作りは物語が好きだからと言っても、昆虫や車への興味のように、知識欲があればすぐ本を見るといふように簡単に実

行に移せない活動かもしれない。また、絵本と言えは物語という連想に縛られて、得意ではないが物語を作ろうとした幼児もいたであろうし、物語は好きでも作ることはしたことがなかったという場合もあるであろう。産みの苦しみを味わう幼児には、寺井(2013)<sup>(6)</sup>のように、物語作りのパターンを示すというやり方も一つの方法であろう。一人の母親が幼児に勧めたように、とりあえず思いついた絵を書かせて、そこからさらにアイデアを出させるというのも幼児の思いつきから出発するという利点がある。また、物語も自分の経験に基づくものが多い(寺井, 2013)<sup>(6)</sup>ので、様々な思い出を思い出すこともよい方法と考えられる。基本的には、大人との対話を通じてイメージを膨らませる(衛藤と野中, 2013)<sup>(9)</sup>ということであろう。

#### 思い出系の絵本作り

思い出系は、自分の経験に基づく作品であり、経験を整理し、ありのままに表現したものであった。作業時の様子を見ると、楽しく糊付けしたり説明を書いたりしていた。作業自体は簡単でしかも楽しい経験を思い出しながらやるので楽しい作業になったのであろう。また、思い出は他の人と共有できるので、母親と会話しながら行う幼児もいた。

子どもが得たものとしては、仕上がった時の満足感や母子の思い出と共感があった。家族のつながりの中で自分を認識することができたのではないかと思われる。

親が再認識したことを見てみると、比較的バラエティに富んでいた。将来の職業、製作の大胆さ、面白いアイデア、見られることに対する恥ずかしさなどであった。自分の経験してきた思い出が、自分がどんな人間であるかを確認する作業を促し、自己形成の基になる(Nelson, 2004)<sup>(10)</sup>ので、自分の思い出を肯定的に整理することが大切である。思い出系では、幼児の思い出への大人の興味や共感が重要と思われる。

(4) 調査5, 6: 幼児と児童の比較から子どもと関わりについての考察調査4: 取り組み方からの支援の考察〔5. 主な論文、学会発表(1)(2)(3)に公表〕

#### イメージを豊かにする

「支援の難しさ」を二回の回答で最も大きな差が出た。調査7では、M6「子どもの持っている物語のイメージを豊かにする」であった。「あまりできなかった」を選択したのは、幼児の回では13人(44.8%)、児童の回では6人(20.7%)である。幼児の回でのJ1の回答の中には、「内容についての話はできなかった」、「子どもがどのような絵本をかきたいのか一緒に決めることができなかつたし、引き出してあげることができなくて反省した」、「絵本の内容は、家に帰ってお母さんと相談するとのことであった」、「内緒、と言われてしまった」などの回答があり、絵本の構想を練る支援に難しさを感じた学生や、会話はで

きて内容に関しては触れられなかった学生がいた。

一方、児童の回でのM1の回答には、すでに構想ができている子どもが多く、絵本の内容を詳しく記述してあるものが目立った。J3には「自分のイメージをもっていて、どんどん作業を進めていた」、「どのように作りたいのか明確であった」、「自分で~を書きたい! ~したい!」があつて、イメージをふくらませる会話がしやすかつた」などの回答があり、学生は児童に対し、考えをまとめたり表現したりするための支援をすることが多かつたようである。また、「自分のやりたいことを自分なりに言葉にすることができていた」、「自分がどうしたいのか、はっきり伝えてくる」、「作りたい話を説明でき、意思を伝えられる」の回答にもあるように、自分の思いを言葉にして伝える力が幼児よりも備わっていることも、学生が絵本の内容を把握できたことにつながっていると考えられる。

コミュニケーションを通じて子どもを見つめる

児童の回で「あまりできなかった」を選択した学生が最多だったのはM7の7人(24.1%)であるが、幼児の回ではさらに多い10人(34.5%)であった。J2の回答に、「最初はどんな話にするかわからなかつたようだが、『表紙はおさるさんにしたんだね。バナナを食べているね。』と声をかけると、はっとして『おさるさんが色々食べる話にする』と言っていた」とあり、絵本の内容が定まらない幼児に対し学生は、家族や友だち、好きなものの話などをして子どもの興味・関心を見出し、それを絵本につなげる提案をした傾向にあつた。このような姿勢がM1やM3、M8などでポジティブな回答が大半を占めた結果として表れた。

幼児には発想の段階から、夢が広がるようなヒントを与えるとよいのではないだろうか。アイデアを引き出そうとするよりは、可能性を与えてあげることが、心によりそうことになる。一方、児童に対しては、すでにもっているイメージについて質問や確認などを行うことで、児童の構想を発展させるようにすることが望ましいと考えられる。

#### (5)まとめ

子どもには絵本を作るためによりそって上手にお話を聞いてくれる援助者が必要なのである。絵本作りは、学生と個々の子どもとの関わりが綿密であり、子どもたちの内面性がはっきりと主張されて子どもの理解が深まり、教師や保育者としての自信や意欲の増長につながる取り組みといえる。援助されることで子どもは、人に理解され、受け入れられていると感じると同時に、自分の経験の意味を確認する活動となるのである。学生が幼児に絵本作りを教える活動を設定し、子どもの絵本作りによりそつことが、内面を重視し自信を持った教師(保育者)を養成するこ

とに役立つことが分った。このように考えると、保育者養成の場に絵本作りの活動がもっと導入される必要がある。

〔引用文献〕

- (1) 植草一世, 大木みわ, 他, 保育者の専門性を高めるロール・プレイング活用 その意義と研修成果, 植草学園大学紀要植草学園大学紀要, 査読有, Vol.4, pp.27-36, 2012,
- (2) 植草一世, 大木みわ, 時田学, 教育現場における教師(保育者)の資質を高めるためのロール・プレイング活用に関する研究, 日本心理劇学会 第17回大会(米子コンベンションセンター)発表要旨集 pp.32 2011年12月4日
- (3) 時田学, 植草一世, 大木みわ, 教育現場における教師(保育者)の資質を高めるためのロール・プレイング活用に関する研究, 日本心理劇学会 第17回大会(米子コンベンションセンター)発表要旨集 pp.33 2011年5月21日 2011年12月4日
- (4) 植草一世, 西村正司, 日本心理劇学会 ロール・プレイングの発見的側面を絵本にする意味, 2008年
- (5) Anne Davis Basting, Forget Memory: Creating Better Lives for People with Dementia. 2009. The Johns Hopkins University Press. USA.
- (6) V・E・フランクフル, 生きる意味を求めて, 春秋社, 1999.
- (7) 田島啓子. 作話に及ぼす幼児と援助者の社会相互作用の影響について 日本女子体育大学紀要. 1998; 28: 69 - 78
- (8) 寺井知香. 幼児の創作絵本への取り組みについて - 保育実践より - . 日本保育学会発表論文集. 2013; 66: 267.
- (9) Nelson, K. and Fivush, R. The emergence of autobiographical memory: A social cultural developmental theory. Psychological Review. 2004; 111(2):486-511.
- (10) 衛藤大輔, 野中千春. 子どもの表現が深まる時 - 絵本製作を通して - . 日本保育学会発表論文集. 2013; 66: 737.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

- (1) 安藤則夫, 植草一世, 馬場彩果, 絵本作りにおける幼児の取り組み方, 植草学園大学紀要, 査読有, Vol.6 pp.59-68, 2014
- (2) 植草一世, 安藤則夫, 馬場彩果, 親や学生と一緒にする子どもの絵本作り, 芸術教育研究所芸術教育の会, 査読無, 2013, Vol.92 pp26-28. 2013年7月23日 <http://www.toy-art.co.jp>
- (3) 植草一世, 馬場彩果, 安藤則夫, 子どもが絵本作りで発見すること. 植草学園大学紀要, 査読有, Vol.5 pp.7-16, 2013
- (4) 幼稚園教育のいくつかの課題 「幼稚

園教育が直面する複合課題に関する共同的研究」まとめとしてー 太田俊己, 植草一世他, 植草学園大学紀要 Vol.5 pp.75-83, 2013

〔学会発表〕(計6件)

- (1) 馬場彩果, 植草一世, 安藤則夫. 絵本作りで学生が幼児の心によりそうこの意味, 日本保育学会第67回大会(大阪総合保育大学)研究要旨 pp 477, 2014年5月17日
- (2) 植草一世, 馬場彩果, 安藤則夫. 絵本作りで学生が幼児の心によりそうこの意味, 日本保育学会第67回大会(大阪総合保育大学)研究要旨 pp 478, 2014年5月17日
- (3) 片山みのり, 植草一世, 他4名, クラスの枠を超えたコーナー活動, 日本保育学会第67回大会(大阪総合保育大学)研究要旨 pp 291, 2014年5月17日
- (4) 植草一世, 馬場彩果, 安藤則夫. 教師(保育者)を目指す学生が手作り絵本に取り組む意義. 日本保育学会 第66回大会(中村学園大学), 研究要旨 pp 932, 2013年5月12日
- (5) 馬場彩果, 植草一世, 安藤則夫. 教師(保育者)を目指す学生が手作り絵本に取り組む意義. 日本保育学会 第66回大会(中村学園大学), 研究要旨 pp 93, 2013年5月12日
- (6) 岡澤元, 植草一世他, 4歳児の絵画表現への広がりー生活経験と材料の関わりー日本保育学会(東京家政大学)発表要旨集 Vol.173 2012年5月

〔図書〕(計1件)

- (1) 植草一世, 他, 学文社, 保育の表現活動, 学文社, 2014, 220.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植草 一世 (UEKUSA, Kazuyo)  
植草学園大学・発達教育学部・教授  
研究者番号: 80320729

(2) 連携研究者

大木 みわ (OKI, Miwa)  
植草学園大学・名誉教授  
研究者番号: 00320721